



前 防蟲科學研究所理事長濱田耕作博士

ないと思ふ。

同じ植物質のものでありながら、木綿は殆んど虫害を蒙らないのに、〔ス・フ〕に限つて特に蟲にやられるのは、何か相當の理由がなくてはならない。之には種々の原因があることだらふ。此所で思ひ出されるのは、遂先日のこと、被服厚生研究會の奈良千代子氏から、次の様なことを伺つた。『同じ〔ス・フ〕でありながら、凝固液の相違によつて、染色状態が違ひ。蟲によくやられるのと、あまりやられないのが有る』と云ふことである。ついでに書き加へて置くが、『被服厚生研究會研究室の陳列室は、全く痒い所へ手が届く様に、實物を豊富に集めてそれぞれ説明を書き添へてある。是非一度は見學して置いてもよい所だと思ふ。』

上述の如く、操作工程の方法などによることも考へられるが、又繊維の構造によることも可成り、重要な役目をして居るのではなからふか。『同じ麥粉で造られたものでありながら、饅頭は好きだが、素麺は嫌ひだとか、冷麥は食べるが、饅頭は好かない、など、云ふことは、常に吾々の耳にする處である。同じ生物であるから、蟲にも此様な選り好みがあるのかも知れない。』〔ス・フ〕の虫害に就きては他日研究の上報告の機會を得たいと思つて居る。〔終り〕。

故 濱田耕作先生之思出

山 田 保 治

大正十三年秋の或日のこと、當時先生は朝鮮新羅の古墳を發掘研究して居られた、理學部の川村多實二教授と同道で私の室を訪ねられ、新羅の古墳から斯んな蟲の翅が出たから、見てくれないかと言はれて、泥にまみれた甲蟲の翅鞘の破片を二、三枚示された。拜見すると、確かに〔タマムシ〕類の翅鞘であると考へられたので、其旨を申上げると、君、〔ソウカネ、ソレハ面白イ〕と言はれながら、とても嬉しさふに呵呵と大笑された。先生は滅多に御笑ひにならない方である。之が御縁となつて、其後時々先生の御室へ御邪魔させて戴いたが、あの時位如何にも嬉しさふに御笑ひになつたことはなかつた。暫らくして後、破片の記載と〔タマムシ〕の圖を畫いて御届け致した處、先生は大變御喜びになつて、君に何か御禮をしたいから、好きな物を言つてくれないかとの仰せである。いくら辭退しても、御聞き入れがないので、兼て先生は畫が御上手なことを伺つて居たから、畫を御願ひ致した處、心易く御引受いたゞき、幾日かの後、朝鮮の田舎の景色を畫かれたのを戴いた。或日の夕方研究室へ先生を御訪ねすると、今、

君に電話をかけよふと思つて居た處だ、實はあの畫が出来たのでねと言はれながら美事な御作品を賜はつた。丁度其時、太田喜二郎畫伯が先生の室へ入つて來られた、すると先生は、君が先日山田君の「タムシ」の畫を見て感心して居たね、之が其山田君だよと、御紹介を受けた、僕は山田君に畫をかゝれたのだが、君は山田君の畫に感心して居たのだから、丁度よい時だ、感心料を拂はないかと申された、すると畫伯は即座に、よし拂はしてもらふと仰せられて萬里之長城の下を、先生と畫伯が支那馬に跨がつて、旅行せられた時のを畫いて戴いた。

先生へ御報告申上げた記載と畫は先生の論文玉蟲翅飾考「慶州金冠塚の遺物と玉蟲厨子」(白鳥博士還曆記念東洋史論叢)大正十四年。の中に收録されて居る。其後暫らくしてから、先生が、君、あの問題は僕には面白いと思ふから、正倉院御物の中にも拜されることだし、法隆寺玉蟲厨子のも此際一緒にして、今少し調べて物にしてはどふかと思ふ、僕で出来ることは何でも便宜を取り計らふからとの、誠に有難い御親切な御言葉であつた、小著「古代美術工藝品に應用せられし「タムシ」に関する研究」昭和七年は、全く先生の御蔭で出来たのである。

時經て、先生は總長に就任せらるゝと同時に防蟲科學研究所理事長として、私達の仕事を統帥して戴くよふになつた時、私は心密かに、先生には餘程御縁があるのだなと、一人で喜びと感謝で一杯であつた。其先生が忽然逝去せられた、全く感懷無量である。人格高傑なる先生が、學界に残された功績は極めて大きい、其偉大な業績は永遠に世界の學界を照すことであらふ。先生は特別に御世辭は言はれない方だし、従つて、御言葉の數も少ない方であつたが、先生の御言葉は何つも心の底から湧出て居た。先生から戴いた朝鮮の畫と、因縁深い太田畫伯の畫は、共に私の家の家寶として永久に保存して居る。

「終り」。

編 輯 後 記

防蟲科學研究所の仕事も順調に進み、創立以來足掛三年「滿二年半」を迎へることが出来た。二代理事長濱田耕作博士逝去のため、現總長羽田亨博士が理事長に就任せられ、中村書記官は退官と共に防蟲科學研究所監事をも退職せらるゝことになつたので。其後任者鐘江富次書記官は研究所監事に就任せらるゝことゝなつた。雑誌第三號の出版が豫定より後れたことは讀者に對し誠に申譯がない。最近、「ス・フ」の蟲蝕ひ、が方々で相當問題になつて居る。國策的見地から、「ス・フ」の使用を獎勵せられて居る今日、質が弱い上に蟲の被害がひどくては、全く困つた問題である。「ス・フ」の蟲蝕ひ、を如何にして防除するかは、即今吾人に課せられた大きな研究題目の一つであると思ふ。(山田記)。